

宮澤賢治の“注文の多い料理店”と “山男の四月”の相補性

— 栄養療法の知的枠組についての研究 13 —

藤 井 義 博

Complementarity of Miyazawa Kenji's “The Restaurant of Many Orders” and “April for the Man of the Hills”

— A Study on the Paradigms of Nutrition Therapy 13 —

Yoshihiro FUJII

Abstract

This study was an attempt to understand the meaning that *Miyazawa Kenji* prayed his readers of “The Restaurant of Many Orders”, his first and last collection of tales, that some pieces of these little stories may finally become their genuine transparent nourishment. “The Restaurant of Many Orders”, by far the most peculiar tale of the collection, is complementary with “April for the Man of the Hills”. The complementarity of these two tales will yield new insights to their readers when they read one tale by contrasting it with the other. The Man of the Hills, the protagonist, has a talent for serendipity, an opportunistic viewpoint for life, an identity transcending corporeity of man, an altruistic viewpoint for favorite food that results from his ability for thinking in the place of what is eaten by man. In other words, he has “a seed of the little heart”, a secret resolution to make self-sacrifice for altruistic deed. The two young gentlemen, the protagonists of “the Restaurant of Many Orders”, has nothing of “a seed of the little heart”. In the restaurant of many orders, the two young gentlemen were so filled with the horror of death just as they realized that they had been unconsciously preparing themselves to be devoured that their faces went all crumpled like wastepaper irreversibly. The two hungry young gentlemen inflicted the horror of death on themselves because of their one-sided interpretation of many orders for want of “a seed of the little heart” in them. If the horror of death is a self-inflicted feeling in close association with one-sided interpretation of verbal expression, “a seed of the little heart” will function as preventive measures against it, and therefore prevent the self-inflicted horror of death as is the case with the man of the hills.

所属 :

藤女子大学人間生活学部食物栄養学科、人間生活学研究科食物栄養学専攻

Department of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Sciences, and Division of Food Science and Human Nutrition, Graduate School of Human Life Sciences, Fuji Women's University

1. はじめに

現代では日本を代表する詩人・童話作家として国際的に知られるようになった宮澤賢治（1896～1933）は、生前に2つの著作を刊行した。1924年4月の心象スケッチ「春と修羅」の自費出版および同年12月の「どんぐりと山猫」をはじめとする9篇の童話を含む童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の刊行である。

童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の序において、宮澤賢治（以下、賢治と呼ぶ）は読者に対して「これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになること」を願っている¹⁾。しかし「あなたのすきとほつたほんたうのたべものになる」とはどういうことか。とりわけこの童話集の一篇の童話作品「注文の多い料理店」は、繁盛している料理店という意味を装いつつ、実は客を食べるために客にたくさん注文をする料理店という不気味な意味を有している。さらにこの童話集の広告ちらしにおいて、この童話作品は、「糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感です。」と説明されている²⁾。そうすると、客を食べるための「注文の多い料理店」は、糧に乏しい村のこどもらによる都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感からなる物語ということになる。そうならばこの童話作品が「おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになる」ことは、糧に乏しい村の子どもらの反感について理解したりそれに共感することを通じて到達されることと思われる。しかしその方法を賢治は語らない。賢治は童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の序において「なんのことだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。」という始末である。賢治が語らないのなら、読者はその方法を知る糸口はないのか。賢治が書いたと思われるこの童話集の広告ちらしにおいて、「これらは決して偽でも仮空でも窃盗でもない。多少の再度の内省と分析とはあつても、たしかにその通りその時心象の中に現はれたものである。故にそれはどんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て萬人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である。」と記されている³⁾。そうするとその方

法は、読者として「卑怯な成人たち」にならない決意と理解することができる。

本論のゴールは、読者として「卑怯な成人たち」にならない決意を見失わないで、一篇の童話作品「注文の多い料理店」を通じて、童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の序において賢治が読者に願ったことすなわち「これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになる」の意味を読み解くことであった。

2. 資料と方法

宮澤賢治の著作のテキストとして、「新校本宮澤賢治全集」全16巻、別巻1巻（筑摩書房、1995～2009年）を用いた。とりわけ、宮澤賢治の童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」のテキストとして、「新校本宮澤賢治全集」第12巻本文篇（筑摩書房、1995年）を用いた。

3. 不気味な物語

童話作品「注文の多い料理店」は、山奥に出現したレストランを舞台に展開される不気味な物語である。「注文の多い料理店」のタイトルの意味の二重性はこの作品の不気味さを包括するものである。この物語の不気味さが何に由来するかを物語の展開に沿って検討する。

3.1. 二つの視点：山猫と二人の若い紳士

都会から狩猟ゲームにやってきた二人の若い紳士が、獲物のまったくくない山奥で、玄関に「RESTAURANT 西洋料理店 WIDLICAT HOUSE 山猫軒」という札が出ている立派な一軒の西洋造りの家で、まるでキツネにつままれたように翻弄される。

札は、英語名の下に日本語名が記されている。まずこの家がレストランすなわち西洋料理店であることを示す。次にレストラン名がWIDLICAT HOUSE 山猫軒であることを示す。二人の若い紳士から見れば、西洋直伝の本格的レストランを思わせる表示である。山猫側からすれば、これは都会文明と放恣な階級を代表するこの二人の若い紳士を自己誘導させるためのしたたかな工夫を凝らした表示である。そしてこの物語の読者は、山

猫側と二人の若い紳士側の言葉の解釈の違いの狭間で、作者の注文の多い心象スケッチに翻弄されてゆくように物語は構成されている。

3.2. 二匹の犬の死

この山奥で二人の若い紳士の案内役であったはずの専門の鉄砲打ちは、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまふ。白熊のような2匹の犬は泡を吹いて死んでしまふ。しかも死んだ犬は、最後に二人の若い紳士のうしろからいきなり戸を突き破って山猫のいる室の中に飛び込んでくる。そしてしばらくして飛びついて開いた次の戸に吸い込まれるように飛んでいってしまう。読者は、自らがつかないうちに、失踪や死の原因を専門の鉄砲打ちと二匹の犬にそれぞれ見出そうと作品中を探すかもしれない。しかしその努力は徒労に終わる。なぜなら作品の何処を探してもそれらの当事者側の原因の記述は見当たらないからである。それどころか作者は、物語集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の序において、そのような読者を見越して予め弁明をしている。「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。」「ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたがないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです。」

原因は外部にある。山奥の奥深さにある。「専門の鉄砲打ちが、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらい山奥」が原因である。「あんまり山が物凄い」ので、「二足いつしよにめまひを起して、しばらく吠つて、それから泡を吐いて死んで」しまったのである。原因は人や犬にはない。それは、山の大自然の恐ろしさを経験したことがなく、しかも自己中心的に物事を見て自らの知識と経験の範囲内で判断する大人の読者には、直ちには認めがたい論理である。このことも賢治は見越している。童話集の広告ちらしには「卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である」とすげなく言い放っている。

3.3. 都會文明と放恣な階級

案内してきた鉄砲打ちがどこかへ行ってしまったことについて、二人の若い紳士は、お互いに何も言及しない。そのために帰り道の見当がつかなくなっているのに、不思議なことである。二人が

言及するのは死んだ犬の損害額と腹が空いて何かを食べたいということだけである。これほど不気味なことが起きる物凄い山奥にいるにもかかわらず、腹が空いて何かを食べたいという。内的欲望(食欲)と利害損得だけが相も変わらず二人を支配し続けている。自分たちの利己的損得と利己的欲求だけしか頭がない。外的状況そのものには無頓着である。これらの重心の偏倚がもたらす見かけの安全感と安定性が、広告ちらしに云う「都會文明」がもたらしている実態であり、「放恣な階級」の実像である。

3.4. 玄関の扉(硝子戸)の言葉

何か食べたくて倒れそうになっている二人の若い紳士にとって、食事は食べる側の利己的な視点からのみ把握される。山奥の料理店に、「おや、こんなところにおかしいね。」と言いつつ、彼らは、食事をしたいという欲望に従って玄関に立つ。すると硝子の開き戸には、金文字で「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」と書いてある。二人はその意味を、ただでご馳走する料理店と解釈する。二人はなぜこのような解釈に至ったのか。

「遠慮」は、(遠いきざしを)深く考えるという意味と人に対して控えめにするという意味をもつ。前者は、計略があるなどと決して深読みなさらないようにという山猫側の意味である。後者は、料理店側に対して控えめにしなくてよいという客側の意味である。二人は控えめにしなくてもよいという意味を自分たちの欲望に適用して「ただでご馳走する」と解釈したところに、「都會文明」のもたらした「放恣な階級」らしさがある。彼らにとって「決してご遠慮はありません」は、相手を完全に無視すること、相手への配慮を100%欠くことへの容認である。

二人が硝子戸を押して中に入るとすぐ廊下になっていてその裏側には金文字で「ことに肥つたお方や若いお方は、大歓迎いたします」と書いてある。実際肥つた若者であったことから、二人は大歓迎の文字に大喜びする。大歓迎にまたも2つの意味がある。山猫側の意味は、「お客さん(くみしやすい相手)」としての大歓迎である。二人の若い紳士にとっての大歓迎とは、肥満の示唆する裕福さと若者らしい新規性がちやほやされることである。

3.5. 第二の扉（水色のペンキ塗りの扉）の言葉

ずんずん廊下を進んでゆくと水色のペンキ塗りの扉には、「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」と書いてある。二人は注文の多いことを「はやっている」という意味に解釈する。そして扉を開けたその裏側には、「注文はずみぶん多いでせうがどうか一々こらえて下さい」と書いてある。ここで二人のひとは顔をしかめた。なぜならこの注文は客からの注文ではなく客である自分たちへの注文と解釈されるからである。しかし早く部屋の中に入ってテーブルにつきたいという思いが勝る。二人とも客からの注文のことだろうと解釈して納得する。

3.6. 第三の扉（赤い字）の言葉

ところがうるさいことにまた一つ扉があって、そこには赤い字で「お客さまがた、ここで髪をきちんとし、それから髪を落としてください。」と書いてある。二人はそれを、よほど偉い人たちがたびたびくる作法の厳しい家なので尤もだと納得する。二人はきれいに髪をけずって靴の泥を落とす。実際、二人の靴は泥まみれになっていたであろうし、髪もバサバサになっていたであろう。しかし二人の解釈は、相手が一般人ならそれは構わないことだとする彼らの通念に基づいていることを示す。

ところがブラシを板の上に置くや否や、それはぼうっとかすんでなくなって、風がどうっと室の中に入ってくる。不気味なことである。二人はびっくりして、互いによりそう。これはもったもな反応である。しかし二人は扉をがたと開けて、次の室へ入って行く。これは不思議な行動である。「早く何か暖いものでもたべて、元気をつけて置かないと、もう途方もないことになってしまふと、二人とも思つたのでした。」とその理由が説明される。ブラシがぼうっとかすんでなくなって、風がどうっと室の中に入ってきたところで、もう途方もないことになりつつあると気づくべきである。しかし二人の判断は、状況により途中で臨機応変に変更され得るものではなかった。「腹が減っては戦はできぬ」のようなある種の決意である。当初の目的である戦は動かせないことであるが、その不動の目的を成し遂げるためには現実的で実際の腹ごしらえこそ第一の準備であるとの考え方である。

3.7. 第四の扉（黒い扉）の言葉

二人が次の室に入って行くと、扉の内側には「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」、そして次の黒い扉には「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」と書いてある。二人は奥にはよほど偉いひとが来ているのだと解釈する。扉の裏には「ネクタイピン、カフスポタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」と書いてある。これを二人は何かの料理に電気をつかうためだと解釈する。この所持品の例示は、二人がネクタイピン、カフスポタンそして眼鏡をかけていたことを示唆する。

3.8. 第五の扉の言葉

すこし行くとまた扉があって、「壺の中のクリームを顔や手足にすつかり塗ってください。」と書いてある。二人は内外の寒暖差による「ひびがきれ」ことの予防であり、奥に来ているえらいひとにちかづくために必要なことのだと解釈する。「こんなところで、案外ほからは、貴族とちかづきになるかもしれないよ。」と云う。塗った後、壺にクリームがまだ残っていたが、「それは二人ともめいめいこつそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。」とある。このさりげない補足は、二人の成り上がりの「放恣な階級」と対比されるべき伝統の「貴族」との違いを端的に示す。

それから大急ぎで開けた扉の裏側には、「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか」と書いてある。「この主人はじつに用意周到だね。」「あゝ、細かいとこまでよくきがつくよ。」と二人は解釈する。次の戸には、「料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐたべられます。早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。」と書いてある。「すぐたべられます。」には、客は主人にすぐ食べられてしまうという意味も込められている。そして頭へばちやばちやと振りかけた香水は酔のような匂がしたが、「下女が風邪でも引いてましがへて入れたんだ。」とかなり無理な解釈をして納得する。

3.9. 第六の扉

そして二人が扉を開けて中に入ると、扉の裏側には大きな字で「いろいろ注文が多くてうるさかったでせう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさんよくも

み込んでください。」と書いてある。今度という今度は二人とも、沢山の注文とは向こうがこっちへしている注文であること、西洋料理店というのは、来た人を西洋料理にして食べてやる家だということに気づく。このあたりから物語は、山猫の手下の獣の子供たちも登場して（ただし青い眼玉と声だけだが）、フィナーレに向かうドタバタ劇風になる。

3.10. カギ穴のついた扉

奥の方にはまだ「一枚扉」がある。この扉は、今までのものとは違って大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてある。「いや、わざわざご苦労です。大へん結構にできました。さあさあおなかにおはいりください。」と書いてある。「おなかにおはいりください。」には、山猫のお腹にお入りくださいという意味も込められている。このかぎ穴からのぞく「青い眼玉」をした山猫の手下の獣の子どもたちの声は云う。「あとはあなたがたと、葉っぱをうまくとりあはせて、まつ白なお皿にのせる丈です。はやくいらつしやい。」「それともサラダはお嫌ひですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげませうか。とにかくはやくいらつしやい。」この呼びかけの内容も2重の意味が込められている。

ようやく事態の深刻なことに気づいた二人の若い紳士は、この子どもたちのおそらく無邪気な声での呼びかけに、ますます恐ろしくなったことであろう。「二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のやうになり、お互ひその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。」と記される。みじめな二人の姿にさらに追い打ちをかけるように、中ではふつふつとわらつてまた叫んでいる。

「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣いては折角のクリームがながれるぢやありませんか。へい、ただいま。ぢきもつてまゐります。さあ、早くいらつしやい。」この叫び声は辛辣である。「へい、ただいま。ぢきもつてまゐります。」は、料理店の従業員が客に対して発する何気ない言葉でもあり、食事を待っている山猫親分の催促に対する返答でもある。

「早くいらつしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもつて、舌なめずりして、お客さま方を待つてゐられます。」は、今や主人が客を食べ

るために待つこと以外の意味はない。この叫び声に「二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。」と記される。

3.11. 次の扉（まっくらやみへの扉）

最後にどんでん返し起きる。物語の冒頭で泡を吐いて死んでしまった白熊のような二匹の犬が、うしろからいきなりカギ穴のついた扉をつきやぶって室の中に飛び込んできて、山猫とその手下どもを室から追っ払う。そして次の扉に飛びつくと、戸はがたりと開いて、「犬どもは吸ひ込まれるやうに飛んで行きました。」となる。その扉の向こうの「まっくらやみ」のなかで、「にやあお、くわあ、ごろごろ。」という声がかぎ鳴り、室はけむりのやうに消える。

死んだ二匹の犬はどのように元の主人のいる現実世界に再登場できるのか。犬は死んで冥界にいるならば、冥界と現実世界との境界はどこにあるのか。死んだ犬は、扉を突き破って山猫と手下のいる室の中に飛び込んできた。そして飛びついた「次の扉」ががたりと開いて、扉の向こうの山猫の声のする「まっくらやみ」のなかに吸い込まれるやうに飛んで行った。これは山猫と死んだ犬が冥界に戻っていったということであろう。かぎ穴のついた扉の向こう側の山猫と手下のいる室が、二人の若い紳士のいる廊下（現実世界）と冥界との間にある境界ということになるであろう。この室は両者の境界であるからこそ、死んだ二匹の犬はその中に飛び込んでくることのできたのである。

次にどこかへ行ってしまった専門の猟師が団子を持って二人を救出しにやってくる。犬は死んでも主人に忠実であったように、猟師は「旦那」に誠実である。「しかし、さつき一ぺん紙くづのやうになつた二人の顔だけは、東京に帰つても、お湯にはいつでも、もうもとのとほりになほりませんでした。」で物語は終わる。これは、二人が不可逆的な心身の変化を来たしたことを示す。

3.12. 現実世界、冥界、両者の境界

山猫と手下のいる室（現実世界と冥界の間の境界）には二つの扉がある。ひとつは大きなかぎ穴が二つついた「一枚扉」で、二人の若い紳士のいる廊下（現実世界）と連絡している。もうひとつは「次の扉」で、まっくらやみの冥界に連なっている。この三層構造は、山奥に現れた「注文の多

い料理店」の場所にも認めることができる。山が現実世界で「注文の多い料理店」が冥界への入り口（現実世界と冥界の間の境界）である。さらにこの三層構造はより広い概念においても認めることができる。すなわち都會（文明）が現実世界、山が冥界、両者の境界が糧の乏しい村である。そうすると「糧に乏しい村の子ども」による「都會文明と放恣な階級とに對する止むに止まれない反感」は、境界からの現実世界への反感である。それは、山奥では境界である「注文の多い料理店」で展開される反感であり、より局所的には、山猫と手下どものいる室（現実世界と冥界の間の境界）における反感である。

その反感の帰結として、二人の若い紳士が不可逆的に心身の変化を来してしまったことは、その目論見が成功したことを意味する。境界において冥界の住人すなわち山猫とその手下（彼らを冥衆と呼ぶことができる）は、現実世界の住人である二人の若い紳士に直接手を下すことはできない。これが童話作品「注文の多い料理店」の基本的な枠組みである。すなわち自業自得の自己変化力、自ら招く脳傷害を利用することが、山猫が唯一利用できる方法であった。それゆえに山猫は言葉の意味の鏡像的二重性を駆使して自己調理を完成させるようにこの二人をうまく導いた（うまく料理した）ということができる。このように「注文の多い料理店」は、童話集の9つの作品の中で突出して不気味な物語である。この物語を読んだ読者は、この不気味な物語がどのようにして「おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになる」ことを願うことができるのか。

4. 補い合う物語

心象スケッチは、「難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である」と主張する賢治は、そのための二つの条件を示す。ひとつは、広告ちらしに云う「卑怯な成人たち」でないことである。これは上述したように読者側の態度、姿勢としての条件である。もうひとつは、童話集の序の「けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになる（傍点引用者）」という言葉である。これは、イーハトヴ童話「注文の多い料理店」の中の童話ひとつだけでは、「あなたのすきと

ほつたほんたうのたべもの」にはならないということである。童話の幾つかが、最終的に、「あなたのすきとほつたほんたうのたべもの」になるということである。童話の幾つかが、読者の中でそれぞれ相補的に補い合った結果として「あなたのすきとほつたほんたうのたべものになる」のである。イーハトヴ童話「注文の多い料理店」は、全体的にかつ複合的に読まれなくてはならない心象スケッチである。

イーハトヴ童話「注文の多い料理店」の9つの童話のうち、童話「注文の多い料理店」と相補的に補い合っている童話は、「注文の多い料理店」と対比して読むべきで物語である。対比することではじめて新たな気づきが得られるため、「おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになる」、そのような物語である。この「おしまひ」を実現する物語である。その物語こそ「山男の四月」である。

5. 山男の四月 vs. 注文の多い料理店

「山男の四月」では、山男は夢の中で、雲が風に流されるように町に出かける。そこで支那人の行商人の陳が勧める水薬を飲んでしまったため、六神丸の箱に変身させられてしまう。

「山男の四月」は「注文の多い料理店」と多くの点において鏡像関係をなしている。その相補性を踏まえながら、物語の主役、主役の登場の様子、脇役、物語の舞台、トリックの方法、トリックへの気づきという観点からこの二つの童話を対比して検討する。

5.1. 物語の主役の特性

主役はそれぞれ二人の若い紳士（注文の多い料理店）と山男（山男の四月）であるが、物語はそれぞれの主役たちの日常生活の場を離れた所で展開する。二人の若い紳士は、娯楽としての狩猟という明確な目的をもって東京から山奥にやってくる。彼らはすでに指摘したように「都會文明」の「放恣な階級」に属する若者である。これに対して山男は、空に浮かぶ雲のように「風にながされるのか、ひとりで飛ぶのか、どこといふあてもなく、ふらふらあるいて」山中から町に入ってゆく。両者の移動方向は正反対（山に入る、山から出る）である。普段の生活の地を離れるのは、それぞれ

がそこに欲求不満を抱えているからであるが、両者で欲求しているものが異なる。二人の若い紳士の欲求は明確である。見栄と気晴らしを求めている。山男は、「飴といふものはうまいものだ。天道は飴をうんとこさえてゐるが、なかなかおれにはくれない。」と思っている。彼は自分でもはっきりと自覚できない不満を抱いている。

5.2. 主役の登場の様子

「注文の多い料理店」の舞台は、歩けば木の葉のかさかさする晩秋の山奥である。作品の目次の日付では11月10日と記されている。二人の若い紳士は、「すっかりイギリスの兵隊のかたち」でいきなり舞台に登場する。そして彼らは、「放恣な階級」の特徴である若いことと肥っていることが強調される。

「山男の四月」は、雪解け後のかれ草のところどころにかたくりの花がゆれる早春、山男の狩猟の場面から始まる。作品の目次の日付では4月7日である。山男は、その特徴が明確に描写される。彼は「金いろの眼」「大きな口」「ばさばさの赤い髪毛」をしている。しかしそのままの姿で舞台には登場しない。山男は、「町へはいつてゆくとすれば、化けないとなぐり殺される」ので、「どうやら一人まへの木樵のかたち」に化ける。木樵としての特徴については一切描写がない。

このように物語の主役は、「すっかりイギリスの兵隊のかたち」をして、「どうやら一人まへの木樵のかたち」に化けて、非日常の舞台に登場する。このようにそれぞれの物語では、すでに化けて舞台に登場した主役が、トリックによりさらに変化すること（木樵のかたちから六神丸の箱になる）あるいは変化の過程（自らを食べられるための食材として自己調理する過程）を体験する。

5.3. 物語の脇役

両物語ともに複数の脇役がいる。「注文の多い料理店」では、「山猫軒」の主人の「山猫」と彼の手下の獣の子どもたちである（青い眼をしている）。彼らは山猫を仲間内では「親分」と呼び、二人の若い紳士に向かつては「親方」と呼ぶ。しかしこれらの脇役は主役である二人の若い紳士の前には全く姿を見せない。「山猫」の存在は、料理店の廊下のたくさんの戸に彼が書いた指示（注文）の文字と最後に逃げる時の闇の中の「にやあお、くわ

あ、ごろごろ。」という声だけである。手下の獣の子どもたちは、扉のかぎ穴からきょろきょろのぞく二つの青い眼玉と扉の向こう側からの呼び込みの声として登場するだけである。

「山男の四月」の脇役は、行商人のかたちをした陳という名前の支那人および同様に六神丸の箱にされた支那人たちである。脇役ながら陳は、とかげのような「ぐちやぐちやした赤い眼」、尖った指と尖った爪という特徴が記される。これは、山男とのface-to-faceでの駆け引きによるトリックに欠かせない要素であるからである。

5.4. トリックの方法

山猫のトリックは、二重の意味をもつ文字言語を巧みに操ることにある。二人の若い紳士は、二重の意味をもつ文字言語の裏の意味がわからないまま一方的に自らに都合がよい解釈を繰り返すことで、自分の目的を実現する代わりに山猫の策略を実現する。レストランの客として注文した料理を食べるための自己準備が、そのまま食べられるための自己準備となる。

トリックは最初の条件付けが肝心である。山奥で取り残された二人の若い紳士は、帰るにもどう行けば戻れるのかかわからないし、しかも空腹で疲れている。丁度その時に、「立派な一軒の西洋造りの家」が出現する。その玄関に「RESTAURANT 西洋料理店 WILDCAT HOUSE 山猫軒」という札が出ている。建物の立派さで度肝を抜きつつ、同時に英語と日本語の標記を駆使して明確にこの家がレストランであると信じ込ませる。いったんレストランだと確信してしまうと、それを大前提にして意図的に両意的な山猫の文字言語の意味を一方的に解釈するために、山猫のトリックにはまってゆく。例えば、「すぐたべられます。」は、食べることができるという意味と食べられてしまうという意味を有している。また「さあさあおなかにはいりください。（傍点引用者）」は、奥の部屋（お中）とお腹という意味の二重性がある。

一方、支那人である陳のトリックは、一見行商人の恰好をしているもののとかげを思わせる容貌が醸し出す恐怖を背景に、言い方や状況により意味が鏡像的二重性を帯びる「よろしい」という音声言語を巧みに操ることで、気が弱くやさしい山男を袋小路に追い込む。追い込まれた山男は心理的葛藤を逃れるために敢えて相手の要求を呑むこ

とになる。陳は、立派な章魚の足に見とれている山男の肩をいきなりたたいて言う。「あなた、支那反物よろしいか。六神丸たいさんやすい。」最初が肝心である。相手の度肝を抜きつつ自分が普通の支那人の行商人であることを主張する。びっくりした山男は陳と同じ言葉を使って「よろしい。」とどなる。「よろしい。」は、「いいです」や「けっこうです」のように言い方や状況によって180度異なる意味になる言葉である。木こりに化けている山男は、自分の声に周囲が注目したことに気づき、「いや、さうだない。買ふ、買ふ。」と言い直す。すると陳は「買はない、それ構はない、ちよつと見るだけよろしい。」と答える。陳は、山男の申し出を一見やんわりとした表現で断るが、それは陳の本当の目的は山男に水薬を飲ませることにあるからである。

この「ちよつと見るだけよろしい。」はトリックの分岐点となる言葉である。それは買わなくてよいという安心や安全の保証ではない。「その支那人のぐちやぐちやした赤い眼が、とかげのやうでへんに怖くてしかた」がない山男にとっては、叱責のように響いた言葉であろう。そして陳は、「あなた、この薬のむよろしい。」と展開する。このように言い方や状況により意味が決まる「よろしい」という言葉を何度も繰り返しながら、陳は山男を追い詰めてゆく。そのうち陳は小指位のガラスのコップを2つ出して、ひとつを山男に渡して言う。「あなた、この薬のむよろしい。毒ない。決して毒ない。のむよろしい。わたしさきのむ。心配ない。わたしビールのむ、お茶のむ。毒のまない。これながいきのくすりある。のむよろしい。」そして陳はひとりでかぶっと呑んでしまう。

山男は、本当に呑んでいいだろうかとあたりを見ると、「いつか町の中でなく、空のやうに碧いひろい野原まんなかに、眼のふちの赤い支那人とたつた二人、荷物を間に置いて向ひあつて立つてゐ」て、「二人のかげがまつ黒に草に落ちました。」とある。この描写は、複数のことを示している。まず恐怖の中で歩き去ろうとする山男を陳は追いかけるように話しかけていた様子を暗示する。山男が気を散らすような人のいない空いろのひろい野原の真ん中で、荷物を間に置いた face-to-face の状況で容貌の醸し出す恐怖を背景に、陳はトリックを見事に成功させることを示す。二人の真っ黒なかげは、山男は早春の低い日差しが陳の容貌を

はっきりと浮かび上らせる位置関係において立たされていることを暗示する。

「さあ、飲むよろしい。長生きの薬ある。のむよろしい。」陳は尖った指を突き出してしきりにすすめるため、「山男はあんまり困つてしまつて、もう呑んで遁げてしまはうとおもつて」、いきなりぶいとその薬をのんでしまう。

このように陳がトリックに使う言葉は、言葉が語られる前にすでに二重の意味を有しているような言葉ではない。陳が使う「よろしい」は、言い方や状況により異なる意味をもつようになる音声言語である。一方、山猫とその手下が使う言葉は、言う前にすでに意味の二重性がある文字言語である。言い方により意味がことなるようになるものではない。

また、「毒ない。決して毒ない。」や「長生きの薬ある。」の表現に、意味の多義性はない。水薬は一箱の六神丸に変身させる薬であることから、一概に毒とは言いがたい。また種々の効能を有する漢方薬としての六神丸に変身するならば、長生きの薬と云つてもはまんざら嘘とはいえないであろう。

しかし陳のトリックは、容貌の与える恐怖を背景として山男をまんざら嘘でもない言葉で心理的葛藤に追い込ただけでは終わらない。「ひとりがかぶつと呑」む演技のトリックと合わせて実行することで、山男が飛んで火にいる夏の虫になるお膳立てを完了する。陳は、実際は水薬といっしょに元に戻す丸薬を合わせ呑む。しかしそのトリックを見抜けなかった山男は、水薬だけを「いきなりぶいつと」呑んでしまい、一箱の小さな六神丸になってしまう。

5.5. トリックに気づいたとき

食べるつもりが食べられるための準備であったという戦慄の気づきは、二人の若い紳士には、一生癒えることのない恐怖の体験となってしまった。なぜ一ぺん紙屑のようになってしまった二人の顔だけはもう元のとおりにはなおらなかったのか。その理由は「山男の四月」の場合と比較することにより浮かび上がってくる。

水薬を呑んで一箱の小さな六神丸が変わってしまった後も、山男のアイデンティティーは継続する。山男は口惜しがってばたばたしようとしたが一箱の小さな六神丸のためどうにもならなかった。

山男のアイデンティティーはかたちを超越している。このように六神丸になった当初は、山男はだまされたことを口惜しがる。しかし、行李に入れられ蓋をされても、「(たうたう牢におれははいつた。それでもやつぱり、お日さまは外で照つてゐる。)」と無理に悲しいのをごまかそうとしたり、急にもっと暗くなったときには、なるべく落ちて着いてユーモアを出す。「(ははあ、風呂敷をかけたな。いよいよ情けないことになった。これから暗い旅になる。)」だまされて六神丸になってしまった山男は、はじめはぎくっとしたが、すぐ、「(ははあ、六神丸といふものは、みんなおれのやうなぐあひに人間が薬で改良されたもんだな。よしよし)」と考える。山男は、利己性よりも利他性の方が良いことを知っている。山男のアイデンティティーは姿かたちを越えて継続するとともに樂觀性を帯びている。

山男の樂觀性は、偶然に幸運な発見をする資質すなわちセレンディピティを備えていることによる。「山男の四月」は、上述したように山男の山での狩猟生活の一場面から始まる。山男は兎をねらって歩いていたが、兎はとれないで、山鳥がはんぶん潰れてしまった状態をとれた。その際、山男は怒りもがっかりもしない。反対に山男は顔をまっ赤にし、大きな口をにやにやまげてよこんでいる。このようなセレンディピティの資質を持った山男だからこそ、陳にだまされて利己的主体を喪失したことを悔しがったり恐れたりはしない。むしろ山男のアイデンティティーを継続しながら別のかたちを持った利他的主体に向上したと考えることができた。

山男にとって利己的主体の喪失は、陳にだまされた結果ではあっても、陳という利己的主体に食われて、利己的な陳の体の構成要素の一部になることではない。また山男のアイデンティティーが消滅してしまうことでもない。そうすると二人の若い紳士に不可逆的な心身の変化を引き起こした恐怖は、人間は身体的存在がすべてであり、その自分が食べられてしまえば、身体は食べた動物の構成要素の一部となり、しかも身体の死によりそのアイデンティティーも消滅するという悲観的な生命観を前提として生じていることになる。山男の樂觀性がセレンディピティの資質にあるなら、悲観的な生命観をもつ二人の若い紳士は、セレンディピティの資質を欠いているはずである。実際、

「注文の多い料理店」は、二人の若い紳士が山で狩猟する場面で始まるが、鳥も獣も一足もない。二人の若い紳士は、「ぜんたい、ここの山は怪しからんね。」とそれを山のせいにする。そして「なんでも構はないから、早くタンタアーンと、やつて見たいもんだなあ。」とあくまで狩猟自体にこだわる。獲物なしの手ぶらでは帰りたくない。そこで昨日の宿屋で出ていた鳥獣を買って帰れば、「さうすれば結局おなじこった。」と算段する。実際二人は顔に不可逆的な変化を来した恐怖の体験の後、当初の予定を変えることなく予定通りに拾円だけ山鳥を買って帰った。何があってもあくまで当初の目的のみを達成しようとする二人の若い紳士にはセレンディピティの資質は育まれていない。

6. 山男と章魚

山男には、以上検討したように、二人の若い紳士にはない特徴がある。山男には、セレンディピティの資質、樂觀的生命観、身体とは独立したアイデンティティーの継続と向上がある。そうならば、彼の食べ物観、好物観にも特徴があることが予想される。

山男は章魚が大好きである。町の入り口のいつもの魚屋の軒につるしてある赤ぐろいゆで章魚を山男はつくづくとながめた。「(あのいぼのある赤い脚のまがりぐあひは、ほんたうにりつぱだ。郡役所の技手の、乗馬ずぼんをはいた足よりまだりつぱだ。かういふものが、海の底の青いくらいところを、大きく眼をあいてはつているのはじつさいえらい。)」と思う。これは大好きな食べ物の理由としては、いささか変わっている。まるで章魚を食べ物としてではなく大好きな仲間の生き物として扱い、畏敬の念を込めて表現している。しかし「山男はおもはず指をくわいて立ちました。」の表現が示すように、章魚は大好きな食べ物なのである。

山男の食べ物の好みは、味や新鮮さなどという食べる側から見た利己的なものではない。かたちすなわち「章魚の脚つき」として「りつぱ」であり、海の底の青いくらいところを、大きく眼をあいてはつているのは「じつさいえらい」と思えるからである。一方、「塩鮭のきたない俵」や「くしやくしやになつた鰯のつら」は、章魚に較べて「りつぱ」ではなく、また「じつさいえらい」とは

感じない。山男の好物観は、食べる側の都合を一方的に述べたものではなく、食べられる側になって考えられたものである。

章魚は、また、山男が六神丸に変身させられた後に、同じく六神丸に変身させられ上海から来た支那人との会話に登場する。この支那人も章魚が大すきだという。「誰だつて章魚のきらいひな人はない。あれを嫌ひなくらゐなら、どうせろくなやつぢやないぜ。」と山男は言う。支那人は、「まつたくさうだ。章魚ぐらゐりつぱなもの、まあ世界中にないな。」と同意する。この会話は何を意味するのか。陳のトリックにだまされるくらいの者は、山男にしろ上海から来た支那人にしろ、食べる側の都合を一方的に述べる利己的な好物観とは無縁の者である。食べられる側になって考えることができる資質を有する者が陳にだまされることを賢治は示唆している。

さらに山男の章魚への思い入れは彼にとっても特別なものであった。陳にだまされて六神丸にされた山男は、風呂敷をかけられた暗い行李の中で、すぐ横にいた六神丸にされた支那人から、どこから来たかを尋ねられる。山男は、「おれは魚屋の前から来た。」と腹に力を入れて答える。すると外の支那人が静かにするよう噛みつくようにどなる。さっきから陳がしゃくにさわっていた山男は一気に怒りが爆発する。山男の答えは、彼のアイデンティティの継続性の由来とその意味をよく示している。その由来は、普段の生活場所の山でもなく木樵に化けて入って入った町でもなかった。自身でもはっきりと自覚できない不満を抱いていた普段の生活の場である山に愛着はなく、かといって町は、空に浮かぶ雲のように「風にながされるのか、ひとりで飛ぶのか」わからない状態で流されていった場所に過ぎなかった。この山男にとって自分という存在の根源を自覚することができる場所が、「りっぱ」とか「じつさいえらい」と感じさせる章魚がつるしてある魚屋の前であった。これが山男のアイデンティティの由来する起点である。それゆえに『「おれは魚屋の前から来た。」と腹に力を入れた答え』た。それに対して、陳から静かにするよう噛みつくようにどなられたため、山男は一気に怒りが爆発することになる。

賢治の「極東ビヂテリアン大会見聞秘録」には、菜食主義者を予防派と同情派に分ける分類図が掲載されている³⁾。予防派は、「じぶんの病気予防の

ために、なるべく動物質をたべないといふのであくまで利己的な連中の集まりである」。同情派は、「喰べられる方になって考へて見ると、とてもかあいさうでそんなことはできないと云ふ思想」である。さらにそのうちの大乗派は、「もしある動物がほかのたくさんの動物の敵であるときはそれを食つてもいいといふ」思想である。自己本位の予防派の特徴が利己性ならば、食べられる側になって考えられる同情派の特徴は利他性である。

この分類図の自己本位の利己性と食べられる側になって考えられる利他性という鏡像的な食物観ないしは好物観は、菜食主義者を超えてすべての人々の間に存在する食物観や好物観に敷衍することができる⁴⁾。章魚が大好きな山男も上海から来た支那人も章魚を食べる以上菜食主義者ではないが、二人とも食べられる側になって考えられる利他的な好物観を持っている。

7. 一つの小さなころの種子

広告ちらしによると、山男の四月は「鳥の北斗七星といつしよに、一つの小さなころの種子を有ちます。」とある¹⁾。それはどういうことか。両者における共通性という視点から検証してみる。

広告ちらしには、鳥の北斗七星は「戦ふものの内的感情です。」とある。鳥の北斗七星を、鳥の大尉（戦勝後に鳥の新らしい少佐に昇進する）とその許嫁は「マヂエル様」と呼ぶことから、「戦ふものの内的感情です。」は、「マヂエル様」と関係している。鳥の北斗七星では、鳥の新らしい少佐は、お腹が空いて山から出て来て、19隻の鳥の艦隊に囲まれて撃沈された敵艦である山鳥を思い出して、あたらしい涙をこぼす。そして大監督にこの敵の死骸を葬ることを願い出て許され、礼をして大監督の前をひきさがり、観兵式の列に戻った鳥の新らしい少佐は、「いまマヂエルの星の居るあたりの青ぞらを仰」ぐ。その後、彼の祈りが記される。「(あゝ、マヂエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりませうやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません。)マヂエルの星が、ちやうど来てゐるあたりの青ぞらから、青いひかりがうらうらと湧きました。」ここには自分の身を捧げる決意を示してマヂエル様に祈る鳥の新らしい少佐の利他性が表現されている。

この究極の利他性は、山男にもある。山男は上述したように、行李の中で「おれは魚屋の前から来た。」と腹に力を入れて答えたところ、外の陳から静かにするよう囁みつくようにどなられる。山男は一気に怒りが爆発して、町に入ったら陳は怪しいやつだとどなってやると云う。すると外の陳はだまってしまい、それは長い間続く。この沈黙に山男は陳が両手を胸で重ねてないのかとも思う。そうしてみると、今まで峠や林のなかで、荷物をおろして何かひどく考え込んでいたような支那人は、みんなこんなことを誰かに云われたのだなと考える。山男はもうすっかりかわいそうになって、今のはうそだよと云おうとしていたら、外の陳はあわれなしわがれた声で言う。「それ、あまり同情ない。わたし商売たたない。わたしおまんまたべない。わたし往生する、それ、あまり同情ない。」山男はもう支那人が、あんまり気の毒になつてしまつて、おれのからだなどは、支那人が六十銭もうけて宿屋に行つて、鰯の頭や菜つ葉汁をたべるかはりにくれてやらうとおもひながら答える。「支那人さん、もういいよ。そんなに泣かなくてもいいよ。おれは町にはいつたら、あまり声を出さないやうにしやう。安心しな。」すると外の支那人は、やつと胸をなでおろしたらしく、ほおという息の声も、ぼんぼんと足を叩いている音も聞こえた。

鳥の新らしい少佐と山男は、それぞれ究極の利他的行為の決意をころろの中で表明した。しかしそのころろの事実を証言できるのは読者だけである。鳥の新らしい少佐は、大監督にも許嫁にもその他の誰にも究極の利他的行為の決意を語っていない。しかしその決意は、共鳴を起こす。鳥の新らしい少佐の心の中での祈りは、マヂェルの星の共鳴を起こす。陳の心身は、山男の慰めの言葉の意味自体ではなく、その言葉の礎である心の中の究極の利他的行為の決意の思いに共鳴している。

8. おわりに

賢治は「山男の四月」を9篇の童話作品からなる童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」のなかでもとりわけて大切にしていた。実際、童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の当初の書名は、「童話 山男の四月」であったことがわかっている。また童話集「イーハトヴ童話 注

文の多い料理店」の冒頭の作品としては、「どんぐりと山猫」ではなく「山男の四月」を置く構想もあった。「山男の四月」を賢治が重視した理由は、山男が「一つの小さなころの種子」を育てていたからであろうと思われる。本論で比較検討したように、童話作品「注文の多い料理店」と童話作品「山男の四月」は、前者が陰なら後者は陽の鏡像関係にあることから、前者は後者の意義を照らし出す重要な作品であるということが出来る。「山男の四月」との鏡像関係にあることが、賢治が「注文の多い料理店」を童話集の書名として採用した一つの理由であると思われる。この童話集は、賢治シェフによる「料理店」であり、読者はこの料理店の「客」であるとする、この料理店は通常の料理店ではなく賢治シェフが読者（の心身）を食べようとしているまことに「注文の多い料理店」であることになる。これが童話集の書名のもう一つの理由であると思われる。

一方、残存する4種類の広告ちらしを見ると、童話作品「注文の多い料理店」はいずれの場合においても冒頭を飾る作品としては考えられたことがない²⁾。賢治は童話作品としての「注文の多い料理店」は、「山男の四月」や「どんぐりと山猫」と同列には置いていなかった。童話作品としての「注文の多い料理店」は、「一つの小さなころの種子」が育まれない場合には、言葉の一方的な解釈により容貌の不可逆的な変化を来す程の恐怖を自ら招くことを示唆している。それゆえに言葉を介して自ら招く死の恐怖の究極の予防法は、「一つの小さなころの種子」を育むことである。

9. 要約

本論は、一篇の童話「注文の多い料理店」を通じて、童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の序において賢治が読者に願った「これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになる」ことの意味を読み解くことであった。

童話「注文の多い料理店」は、童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の9つの童話作品中で突出して不気味な物語である。「山男の四月」は「注文の多い料理店」と鏡像関係にあり、その対称性を踏まえて再びそれぞれの童話を読むと新たな気づきが得られる。「注文の多い料理店」の主

役の二人の若い紳士とは異なり、山男は、セレンディピティの資質、楽観的生命観、身体とは独立したアイデンティティの継続と向上、食べられる側になって考えられる利他的な好物観を有している。言い換えると、究極の利他的行為の決意をこころの中で表明する「一つの小さなこころの種子」を有している。二人の若い紳士は、注文の多い料理店で我知らず食べられるために自己準備してきたことに気づいたときの死の恐怖により不可逆的に「顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のやう」になる。空腹の二人の若い紳士は、「一つの小さな心の種子」を有さないことから、多い注文を一方的に解釈することで死の恐怖を自ら招いてしまう。もし死の恐怖が言語表現の一方的な解釈と密接な関係にある感情ならば、「ひとつの小さな心の種子」は、言語表現の一方的な解釈を未然に防ぐこ

とで、山男の場合のように自ら招く死の恐怖を予防するように働くものであろう。

引用・参考文献

- 1) 宮澤清六, 他編. 新校本宮澤賢治全集, 第12巻 童話 [V]・劇・その他 本文篇. 筑摩書房; 東京: 1995, P.7.
- 2) 宮澤清六, 他編. 新校本宮澤賢治全集, 第12巻 童話 [V]・劇・その他 異稿篇. 筑摩書房; 東京: 1995.
- 3) 藤井義博. 宮澤賢治の聖い資糧——栄養療法の知的枠組についての研究 10——. 藤女子大学紀要 (第II部) 2013; 50: 25-37.
- 4) 藤井義博. 特集〈大学における健康教育〉 大学生の食事と健康教育——「雨にニモマケズ」の生活法を教材として——. CAMPUS HEALTH 51(2): 56-61.